「どこに」「だれと」は秘密にしたい　スマホとプライバシー

【物語編】

■カフェ

佳乃と春菜がスマホをいじっている。
春菜、佳乃のスマホを覗き込んで。
春菜「佳乃、何してるの？」

佳乃「春菜、、接触確認アプリってあったでしょ。でも、ウイルスも落ち着いてきたし、そろそろ削除してもいいかなって。」

春菜、頷きながら。
春菜「ああ、そんなアプリあったね。私は、結局そのまんまだよー。」

佳乃「たしか、ウイルス感染を報告した人の近くにいたら通知がくるんだよね。」

春菜、ふーんという顔。
春菜「私達は街の中で誰とすれ違ってるか分からないけど、スマホはなんでも知っているってことかぁ。」

佳乃「地図アプリとかはGPSだっけ、スマホが持ってる位置情報の機能を使うでしょ。」

春菜、思い出したように。
春菜「ああ、それなら私何度か使ったことある。わたし、ちょくちょくスマホを置き忘れちゃうから、どこにあるのかを家のパソコンからクラウドで確認したことあるよー。うっかりうっかり。」

佳乃、怪訝そうに。
佳乃「え、大丈夫なのそれ？」

春菜「えー、どこにあるかすぐ分かるんだから大丈夫だよー。場所がわかるといえば、先輩がみんなに勧めてたアプリあったよね。」

春菜、自分のスマホに入っているアプリ（画面上のアイコン）を示す。
佳乃、春菜のスマホの画面を見て。
佳乃「あ、待ち合わせに便利だから、みんなで入れたアプリね。」

春菜「そう。お互いの居場所が分かるなんて、便利な世の中になったもんだ。」

佳乃「まあね。私は削除したけど。春菜は使ってるの？」

春菜、首を傾げて。
春菜「私は別に・・・入れてそのままっていう感じ。別に邪魔になってないから。」

佳乃、再び怪訝そうに。

佳乃「そっか・・・うーん、やっぱり不安だなぁ。それって、合宿の関係者に居場所が筒抜けになってるってことよね？」

春菜、あっけらかんと。
春菜「そういえばそうだけど、大丈夫じゃないかな？みんな迷惑かけるようなことしないでしょ。」

亮がやってくる。
亮「おー、やっぱりいた！合流できた！春菜のところに、佳乃もいると思ってさ。佳乃にレポートのことで聞きたいんだよね。」

春菜、えっ、という表情。
春菜「ちょっと待って！何でここにいると分かったの？」

亮、スマホのアプリを見せながら。アプリには何人かの合宿の参加メンバー（春菜と亮を含む数名。ただし、佳乃はいない）が大学近くの喫茶店とそのまわりに散らばっている画面。

亮、スマホを見ながら（佳乃と春菜を見てない）
亮「これこれ。合宿のときのアプリを見て、春菜がここにいるって分かったからだよ。」

佳乃と春菜、顔を見合わせて。
佳乃・春菜「大丈夫じゃなかった！！」（心の声）

亮、スマホをにらんだまま。
亮「これ、みんながどこにいるか分かるから便利だよね。本当助かったよ。」
亮、はっと思い出して。
亮「そういえば・・・こないだ大谷先輩と春菜、ふたりでこのお店にいたよね？このアプリで分かっちゃったよ。」

亮、春菜を見て。
春菜、うろたえて。

春菜「ちょっ、あんた！！」
佳乃「えっ、そうなの？大谷先輩と春菜が？」

亮「まあね。合宿関係のみんなで使おうって決めたものだから、他にも見てた人いるかもね？」

佳乃「やっぱりそのアプリを入れたままにしておくと、誰とどこにいるのかまで分かっちゃうのね・・・」

春菜、オロオロ。
春菜「他の人も・・・」

春菜は困った顔、佳乃は心配そうな顔。
春菜「どうしよう～？？」

【解説編】

■カフェ

天の声「はい、いくつか気になることが出てきましたね。順を追って整理していきましょう。人に知られたくない、また干渉を受けたくない私的なことがらをプライバシーといいます。
お互いのプライバシーを尊重し守ることは人間の社会生活の上で重要なことです。ここではこのプライバシーとの関係で位置情報や接触情報のアプリについて考えてみましょう。
今回、亮くんが春菜さんの居場所を知ることができたのは、「位置情報を共有するアプリ」をスマホに入れて、それを使ったからですよね？」

亮「はい、そうです。春菜がいるところに佳乃もいるかなと思って。」

佳乃「こういうことがあるかなと思ったから、私はアプリを削除しました。」

天の声「このようなサービスでは、人工衛星からの信号で位置情報を確認するシステムの機能を使います。このアプリの場合、スマホが位置情報をサーバに送信し、利用者は居場所の情報をネット上で共有することになります。このような仕組みは、注意が必要な小さな子供やお年寄りなどの居場所を確認するために使われることもあります。今回は合宿のときに待ち合わせしやすいように、位置情報を共有するそのアプリをみんなで自分のスマホに入れたわけですね。」

春菜「はい、そうです。その後のことは特に考えていませんでした。」

天の声「これが便利だというのは間違いありません。ただ、居場所の情報は個人のプライバシーに関わり、人に知られると不都合なことや望んでいないことである場合もあります。この場合、アプリを入れるように言われた方は、言われるがままに入れるのが良いかどうか考える必要があります。その意味では、アプリを削除したという佳乃さんの判断は正しかったかもしれません。」

佳乃「はい。もう使ってないし、何となく、危険かなと感じたんです。」

天の声「また、便利だからといって、このようなアプリを他人にインストールさせて、居場所の情報を集めるという行為や使い方が適切なのかについても考えてみる必要がありそうですね。 そして、亮くん。春菜さんの居場所が分かったからといってそのことを利用するのも、プライバシーの面からはちょっと感心しませんね。」

亮「確かに、そうですね。友達だからと気軽に考えてました。」
春菜、亮を見て。
春菜「プライバシーは大事ですよね！」

天の声「さて、ではもうひとつの話題、感染症対策の接触確認アプリについても考えてみましょう。このようなアプリにはさまざまな種類と実現方法がありますが、人と人との間の接触を調べることとプライバシーへの配慮のバランスを考えて設計されていることが多いのです。
日本での例を説明します。アプリが起動すると、個人が持つスマホごとに他の機器とは重ならない識別番号が生成されます。アプリが動作している間、ある人と一定時間以上近い場所にいた時に、スマホ同士で識別番号の情報が交換されます。」

佳乃「誰と一緒にいたとか、そのような情報が記録されるのですか？？」

天の声「いいえ。違います。それぞれのスマホに記録されるのは、近くにいたことのあるスマホの識別番号だけです。

もしも誰かが新型ウイルスに感染した場合、その人はスマホのアプリを使い、感染した事実を国のサーバに報告します。これにより感染した人のスマホの識別番号が、それぞれの人が持っているスマホのアプリに伝えられ，アプリが記録している「これまでに近い場所にいた相手の識別番号」がそこに含まれているかを確認します。
つまり、個人のスマホに保存される「誰と誰が近くにいたか」という情報と、国のサーバに記録される感染した人のスマホの情報を組み合わせることによって、感染した人と近くにいた事実が当人にだけ伝わるようになっているのです。
なお、このときのスマホ同士での情報交換には、近距離無線通信方式のBluetoothが利用されます。位置情報のアプリと違い、人工衛星から得られた情報を使うわけではありません。」

佳乃「うまくできていますね。別々に保存された情報を組み合わせることで、自分も感染したかも知れないことが分かるようになっていて、しかもプライバシーも守ろうとしているんですね。」

天の声「一方、他の国には、スマホ同士の接触情報がそれぞれのスマホにバラバラに保存されるのではなく、国の用意したサーバに全員の情報が蓄積される仕組みになっているという例もあります。」

春菜「えー、そういう国もあるんですね・・・それは、ちょっと抵抗あるかも・・・」

天の声「新型ウイルスの感染拡大は、プライバシーに対する考え方や、情報技術を応用するにあたっての問題点について、それぞれの国や社会の違いを明らかにするものだったとも言えるでしょう。」

佳乃「なるほど。大きな社会問題が起こったから、見えてきたものなんですね。」

春菜「私は、やっぱりプライバシーを大事にしてほしいなぁ。」